百人一首

こんにちは。私はアンヤと申します。オスロ大学の日本せんこうの 2 年生で、日本の古典や文学に興味があります。

みなさんは「百人一首」が何か知っていますか。百人一首とは鎌倉時代初期に藤原定家という人が撰集した、百人の詩人が一ずつ書いた短歌をあつめた詩集のことです。

藤原定家は歌人としてだけでなく、和歌界の第一人者でもありました。 百人一首の中の詩は 8 世紀の平安時代から 13 世紀の鎌倉時代にかけて集められました。平安時代からの日本は中国からの影響が薄れ始め、独自の美意識を発達させ、日本文学の最盛期でもありました。

この詩集で私の好きなところは、これらの百首の背後にある繁栄と衰退の繋がりです。例えば 9 番の小野小町の歌は自分の美しさの繁栄と衰退を花のあせていく色になぞらえて書いています。詩はこのように…。

「花の色は　うつりにけりな　いたづらに
わが身世にふる　ながめせしまに」

この詩では、美しく咲く花と、時間がたって色あせて散る花びらを比較しています。小野小町はとても美人だった人として有名です。彼女は、散る桜の花びらを眺め、過ぎてしまった自分の若いころの日々を嘆いていて、この詩を作ったのです。この詩は彼女の美しさが衰退していく詩と言えるでしょう。

そして、５５番の藤原公任の歌はこのように書かれています。

「滝の音は　絶えて久しく　なりぬれど
名こそ流れて　なほ聞こえけれ」

この詩は物事の無常、「物の哀れ」を反映していますが、一方で、他の意味を反映していると私が思います。いずれ滝が干上がるように、人々もいずれ死にます。しかし、不滅ものがこの世にあります。名作とは、たとえそれを作った人が亡くなっても、その作品は世界中の人々の心の中で生き続けるものです。百人一首もまた不滅の名作の一つでしょう。

歴史にも、人の人生にも繁栄と衰退があります。 しかし、繁栄が良くて衰退が悪いとも言えません。 小野小町が、たとえ自分の人生を嘆いても、彼女の伝説は語り継がれ、彼女の歌は今も歌われ続けています。また、藤原公任は何かが衰退したり、終わりを迎えたりしても、それが完全になくなるわけではないと、永遠に続けると信じたのです。

文化と歴史を学ぶ上で大事なことは、この繁栄、そして衰退の課程から何かを学ぶことではないでしょうか。私たち人間は生まれ、生き、愛し、年を取り、過去を懐かしみ、そしていつか消えていきますが、最終的には人生の果実が残り、私たちの一部として未来へと続いていきます。これらの詩が千年たった今でも私たちにとどいているように。

これが百人一首を読んで、私が学んだことです。ですから皆さんもぜひ百人一首を読んでみてください。

ご清聴ありがとうございました。